

掛川市茶振興計画の中間見直し(案)
「掛川茶未来創造プロジェクト」に対する意見公募について（結果）

□ 募集期間 令和4年4月25日（月）から令和4年5月27日（金）

□ 提出件数 37件（6人）

No.	項目	意見の概要	市の考え方
1	全体	掛川茶業の分析が余すところなく把握されており課題と施策は充分と思う。	ご意見ありがとうございます。 この掛川茶未来創造プロジェクトを新たな指針として、持続可能な茶業実現に取り組んで参ります。
2	P. 8 第3章 2 掛川茶未来創造プロジェクトの指標	目標について資材高騰している中で1,000ha40億円1反当たり40万円の産出額では省力化が進んだとしても魅力を感じられない。	茶産出額は、令和8年度の目標として設定しております。昨今の世界情勢による資材価格の高騰まで反映できているものではありませんが、生産者の経営を安定化させるための指標としておりますので、40億円で満足することなく取り組んで参ります。 指標については、令和8年の改定時に見直しを行います。
3	P. 10 第4章 I、1 (1) 茶業発展のための生産者を中心とした推進体制の確立	漠然としていて、どういう体制を作ろうとしているのか具体性に欠ける。 これだけ差し迫った状況を逆転するには、この計画全体を俯瞰して指揮できる組織(責任体制)が必要。 生産者、茶商、行政、JA、お茶インストラクター等、お茶に関わるいろんな分野の頭脳を集めてプロジェクトチームを作り、実際に動きながら成果を積み上げていかないと、掛け声倒れになるのではないかと。 何をやるにも、「誰がするのか」が明確にならないと、人は動かない。	この項目では、生産者の連携が希薄であり、将来展望を検討する場がないことから、生産者を中心として将来展望を検討、実行する体制の確立を目指すものです。 計画の推進にあたっては、各施策ごとに記載の体制図の組織を中心とした実行体制により、具体的な取組（アクションプラン）を策定し取り組んで参ります。 この計画策定にあたっては、生産者、茶商社、農協、行政、学識経験者の策定委員からご意見をいただきながら策定を進めてきました。進捗管理についても、策定委員の方々からご意見をいただきながら進めて参ります。
4	P. 15 I 茶産地掛川を支える一次産業の所得向上 2 需要に応じた茶生産への転換 (1) プロダク	日本茶 AWARD のようなコンテストへの出品を通じた消費者の嗜好調査のため、出品を奨励する施策を創設し、戦略的な生産が行われるよう研究や嗜好調査を行う実行委員会を組織する。	ご意見のコンテストを通じた消費者の嗜好調査につきましては、施策として記載した①消費者ニーズを把握する機会の創設、②市場調査の実施の具体的な取組として、検討して参ります。

5	トアウトからマーケットインへの茶生産者の意識改革	嗜好品としての緑茶に留まる限り、需要拡大は望めない。別項目とも重複するが、ノンカフェインの番茶、ほうじ茶など「常飲できる」普段飲みのお茶にも力を入れるべき。また、エシカル消費指向の人たちは、ノンカフェイン飲料を求める傾向がある。	ご意見のとおり、深蒸し茶に固執することなく様々な消費者のニーズに対応する生産が必要と考えています。茶商社と生産者が連携した生産体制を構築し、消費者ニーズに対応した生産、商品開発に取り組んで参ります。
6	P. 16 I、2 (2) 有機栽培などの海外輸出、エシカル消費需要に対する茶生産の推進	国の協力や支援が必要なため、国との連携を記載するべき。	ご意見のとおり、有機栽培の推進にあつたては、国の協力・支援が必要と考えており、I、3、(2)に記載のとおり、有機農業産地づくり推進事業(国補助)を活用し、取組を推進して参ります。
7		碾茶はまだまだ需要はありそうだが、中国産との差別化やターゲットの明確化が必要である。	輸出推進にあたっては、県・市、茶商社、生産者、J A等による輸出推進体制を構築し、ターゲット国等の検討を行って参ります。 関連Ⅱ、3、(1)
8		肥料を削減して栽培するその技術があるのならば、それを明確に示される方が、画期的だと期待する。	化学肥料や化学農薬の低減のためには新たな技術の研究が必要と考えており、茶生産における環境負荷調査、低減策の研究と確立に取り組んで参ります。 関連Ⅰ、3、(2)
9		茶改植の推進も、進捗しておらず、温暖化に耐えうる品種、そして「さえみどり」に勝てる品種を選抜に早く取り組むべき。	品種に対する具体的な記載はありませんが、輸出推進体制を構築し有機栽培、碾茶製造を視野に適正な品種の検討を行ったうえで、茶改植を推進して参ります。 関連Ⅱ、3、(1)
10		エシカルは潮流ではあるが、そこへのアプローチは、様々な異業種からの横断的研究が必要である。	S D G s への関心が高まっており、有機栽培等にいち早く取り組むことでエシカル消費需要への対応を目指して参ります。
11	P. 17 I、2 (3) 荒茶品質の向上と技術の継承	地域共同、茶農協の限界。意思決定は早く、合意形成をもって進めていくことが出来る組織の改編の促進は、奨励金を出しても必須。自園自製は壊滅的でその担い手を救済する仕組みも必要。	協同工場などの茶工場について、現状への迅速な対応、成長戦略を描ける体制への転換が必要と考えており、利益の最大化を可能とする組織経営体(株式会社化)の育成に努めてまいります。 関連Ⅰ、1、(2)

12		産地賞受賞時の祝賀イベントの開催よりも、被覆資材の贈呈や長崎や宮崎などへの研修経費を拠出する方が実利があると考える。	祝賀イベントは、消費者も巻き込んでわかりやすく盛り上げることで消費拡大と生産者のやりがい創出を目的としており、今後取り組むべき施策と考えています。ご意見の被覆資材の購入支援は、高付加価値茶生産推進事業として、購入費の補助を実施しており継続して参ります。また、視察研修費についても、出品対策事業として支援しており、今後も継続して参ります。
13		経営が厳しく、畑にお金が回らない事態になっている。経営体の損益分岐点の調査が必要。(畑に投入する予算が激減しているならば、その予算を埋めるデカップリングの考察)	ご意見のとおり、経営が厳しく肥料等の必要な経費まで削減されると、品質低下も懸念されます。生産者全体が危機感を共有し、将来展望を検討、実行する体制を確立し、現状認識などに取り組んで参ります。
14	P. 18 I、3 (1) 世界農業遺産「静岡の茶草場農法」の継承と地域資源としての活用 P. 19 I、3 (2) みどりの食料システム戦略実現に向けた活動	肥料の気体化による亜酸化窒素 N ₂ O の温暖化への影響は、CO ₂ より大きいと言われており、この点の論破が必要である。	ご意見のとおり、CO ₂ などの温室効果ガス排出については生産工程全体を捉えて取り組んでいく必要があると考えています。そのうえで、茶草場の CO ₂ の削減効果などの茶草場農法の優位性や他作物と比較して永年作物であるお茶の CO ₂ の吸収・固定等の CO ₂ 削減貢献度の情報発信に取り組んで参ります。
15	P. 20 II、1 (1) 持続可能な荒茶取引（茶業版フェアトレード）環境の整備	大きな施策となるので、国・県との関わりを求める必要がある	取引の在り方、茶市場の在り方に踏み込むこれまでにない施策となっています。新たな流通構造の構築の検討にあたっては必要に応じて、国・県にアドバイスを求めていきたいと考えています。
16		市場介入は難しいため、デカップリング（分離）により、有機栽培生産へシフトする組織に直接支援や、組織改編へのハードソフト両面の体質強化支援など、税金投入の正当性があれば支援するほうが取り組みやすいと考える。	ご意見のような公金を活用した市場介入は考えておりません。これまでの取引では、生産者の持続可能な経営を担保することは困難なため、生産者と茶商社が連携して生産計画を立て、相場によらず適正な価格で取引できる仕組みの構築などを目指すものです。
17		担い手が存在する生産継続が可能な工場の社会的アピールと、担い手への寄付や投資が集まる仕組みづくり。	ご意見は、まさにエシカル消費に関することと考えています。茶業版フェアトレード認証制度の構築や茶草場農法の SDGs を前面に打ち出した情報発信などにより、企業からの投資やエシカル消費を呼び込んで参ります。

18		市場相場への対応を直接的に行うならば、新市場の創設の方が早期に改革実施され则认为する。国の支援を受けてグローバル市場創造に着手すべき。	先の回答のとおり、公金を活用した市場介入は考えておりません。
19		今回のフェアトレードが未来のお茶の生産流通に携わる方への投資という事であれば、一定の理解はある。ただ、フェアトレードの趣旨と、農家や茶商売の生活の為と言うのは一致しないので、そのような保身的な考えであれば、反対である。	先の回答のとおり、公金を活用した市場介入等は考えておりません。茶業版フェアトレードは、相場によらず適正な価格で継続的に荒茶を販売できる仕組みを構築し、生産者が安心感と公平感を持って経営を持続的に行える環境の構築を目指すものです。
20		それよりも販売店での安売りやネットでの価格ありきの販売を改善する策を立ち上げて頂きたい。 産地の会社やお店が価格を極端に安くして販売するのでは、消費地の問屋や小売店、なにより、急須で掛川茶を飲んでくださるお客様に悪影響を与えてしまう。 もっと小売りに注力すべきで、それにより、客層の変化や、価格帯の変化などリアルな景況感を掴むことができる。小売りが強い会社は、ファンがつき、業態変換しても生き残る事が出来る。 掛川茶としてもブランド定義で、安易な安売りを止める事、生産者問屋はもっと勉強する事、汗をかいて販売する事が先決だと思う。	今回の茶業版フェアトレードでは、持続的な茶生産を可能とするものであることを消費者に示す仕組み（認証制度）もつくることで、エシカル消費を喚起する仕組みの構築を目指しています。 また、Ⅱ、1、(3)に記載のとおり、使用原料の基準、商品表示の基準を作り認証する制度も検討していきます。 このような基準作り、認証制度は、価格ありきの販売の改善に寄与するものと考えています。
21	P. 22 Ⅱ、1 (3) 安全安心な掛川茶の流通	これまでの定義でどのような成果や影響があるかを、データで示せるよう調査するべき。	使用原料の基準、商品表示の基準などについて検討を行う中で必要に応じて、成果や影響について調査して参ります。
22	P. 24 Ⅱ、1 (5) 仕上げ加工技術に関する情報発信の強化	仕上げ技術を磨く場の提供と継承	現在も仕上技術競技会が市内外で開催されております。これらの優れた仕上げ加工技術が消費者に伝わっていないため、情報発信の強化に取り組み、茶師の担い手確保にもつなげて参ります。
23	P. 25 Ⅱ、2 (1) 生活様式に対応した商品開発	茶器の開発や、商品の開発もよいが、掛川茶のカフェ開店や掛川茶を置いてくれる多様なカフェへのアプローチをお願いしたい。	ご意見のとおり、掛川茶のカフェなど消費者がお茶と接する機会の提供は、まだまだ少ない状況です。お茶に関する体験メニューの充実化に取り組んで参ります。関連Ⅲ、2、(1)

24	P. 26 Ⅱ、2 (2) 若者に選ばれる商品開発	デザインは、プロのデザイナーを招聘する方向を模索されたい。	若者ニーズの把握を行い、魅力的なパッケージデザインの商品が開発されるように調査研究や研修会を開催して参ります。
25	P. 28 Ⅱ、3 (1) 海外輸出に対応する茶の流通	向こうの水に合わない、いくら良質のお茶でも勝負できない。 外国人の日本茶インストラクターや、海外のお茶事情に詳しい業者等に協力してもらい、リサーチして掛川茶を売り込める国や地域を絞り込んだ方がよい。 あと、P. 31 にもあるが、抹茶は多種多様な料理やお菓子の材料になる有望素材。中国の若い層に抹茶商品が人気である。 ぜひ掛川でも製造工場を作って売って売込んで欲しい。	ご意見のとおり、情報収集は重要と考えております。輸出推進体制を構築し、情報収集、ターゲット国の検討を進めて参ります。 掛川市内でも、抹茶の製造がされていますが、まだまだ少ない状況です。原料となる碾茶製造に向けた実効性ある検討を進め、抹茶の生産拡大に取り組んで参ります。
26	P. 29～33 Ⅲ、1 (1) 掛川茶リブランディングプロジェクトの推進 (2) SNS 等を活用した効果的な情報発信 (3) 海外に向けた情報発信強化 2 (1) お茶に関する体験メニュー充実化 (2) 未来を担う子供たちへのお茶学習の充実	日本茶インストラクターやアドバイザーを育成して掛川茶のために登用・活用し技術等の底上げを図る。	ご意見のとおり、日本茶インストラクターやアドバイザーとの連携が必要であると考えています。 推進体制の図に日本茶インストラクターを追加します。
27	P. 29 Ⅲ、1 (1) 掛川茶リブランディングプロジェクトの推進	駅前にお茶のアンテナショップが必要。ここに行けば掛川のたいていのお茶が揃うという場所も、他所から来る人に親切だと思う。 もっとカジュアルにお茶を楽しむ場を意識して作る必要がある。 また、それを実行する協力者(お茶インストラクターはもとより、そこまで敷居を高くせず)を募り、経験を共有する。	掛川駅構内に、これしつか処がありお茶も豊富に取り扱っております。しかし、掛川駅周辺を含めて、市内にお茶を飲める場所やお茶に関する体験など消費者がお茶と接する機会の提供は、まだまだ少ない状況です。インストラクターなどと連携し、観光振興、地域産業に繋がる取組として推進して参ります。 関連Ⅲ、2、(1)

28	P. 32 Ⅲ、2 コト（体験等）の充実化による消費拡大 (1) お茶に関する体験メニューの充実化	モノからコトを売る時代とあるが、コトは文化であると思う。 「茶を飲む文化」を市民全員が習得し、掛川市の日常に茶を飲む風景を根付かせることが大事である。 コトを売るのは、コトを買いたくなる消費者の判断に任せ、コトを上げ、根付かせ、習慣化させ、10年後に掛川市民全体がどう変わったかの検証が必要だと思う。	茶産地掛川において、お茶を飲み、もてなすことは生活の一部となっており、切っても切り離せない文化です。こうした文化を、次世代にもつなげていくため、子供たちへのお茶学習の充実や掛川市緑茶で乾杯条例の普及を通じて、お茶を飲む文化をさらに根付かせていきたいと考えています。
29	P. 33 Ⅲ、2 (2) 未来を担う子供たちへのお茶学習の充実	総合学習だけでなく、普段からリーフ茶を飲むように、給食の後当番がお茶を淹れてみんなで味わうことなどはいかがか。	現在、掛川茶振興協会により市内の幼稚園・保育園・こども園、小中学校等にお茶が提供され、給食の時間に緑茶が飲まれています。 こうした取り組みを継続するとともに、子供たちがお茶と茶業に関心を持ってもらえるように学習機会の充実に取り組んで参ります。
30	P. 34 Ⅲ、2 (3) 茶園景観及び世界農業遺産の有効活用	最近県内で、茶畑を観ながらお茶を飲む「茶の間」が広がっている。 縁側でもいい、各茶産地一ヶ所ずつくらいそういう場所があって、お茶を楽しめる仕組みを作れないか。	ご意見のような茶園景観を体験できるメニューなど、観光資源としての有効活用ができていない状況です。 茶園景観や農業遺産などの有効活用、地域の利益になる仕組みづくりに取り組んで参ります。
31	P. 35 Ⅲ、3 (1) 緑茶効果に関する情報発信の充実	静岡県と協働で、県立大学や静岡大学、他の全国の医大、薬学部等で研究頂くよう、支援協力体制を構築することを期待する。	ご意見のとおり、これまでも掛川スタディをはじめ、効能研究へ積極的に協力して参りました。これからも大学等の研究機関に積極的に協力をして参ります。
32	自由意見	お茶は本当に売れない。そんなことは決してない。ただ、これまでと消費と流通は変化している。急須からペットボトルお茶屋からネット。 ペットボトルでお茶を飲む人は増えており、その客層を取り込むことで、ビジネスチャンスとなる。 流通も、農家さんが自分でお茶をどんどん売ればいいと思う。いつまでも問屋の顔色を伺っているのではなく、競争すればいい。今のお茶の業界は、戦う事すらあきらめているのではないか。 お茶は売れない。この言葉を業界に携わる中で、何万回も聞いた。この言葉がどれほど人の希望を打ち砕いてきたか経験者として痛感している。本気で何とかしなくてはならない状況であれば、是が非でも行動するはずである。 時間もかかるかもしれないし、大変だとは思いますが、自分たちで積み重ねた物こそが、本当の価値になると思う。大した事は出来ないが、出来る事から取り組んでいこうと思う。	貴重なご意見ありがとうございます。 この掛川茶未来創造プロジェクトでも、茶業界を取り巻く環境は急速に変化していますが、これを悲観するのではなく、好機と捉え、積極的なチャレンジと大胆な構造改革を行い、茶産地として持続的に発展させることを目指していますので、今後ともご協力をよろしくお願い致します。

33	自由意見	手元の資料から掛川市農業を 35 年前と比較してみた。 前数字が現在（2020 旧掛川）、（）内 35 年前（1985）。 ・農家数 1436 戸（4700 戸） ・茶農家数 536 戸（4100 戸） ・製茶工場 59 工場（498 工場） ・茶商社 34 社（43 社） このまま続きますと「掛川茶」消滅の危機を感じる。	ご意見のとおり、今が茶産地存続の危機的状況であり、茶業界、行政及び市民が共通の認識として、取組を推進していく必要があると考えています。
34		生き残るために「茶業版フェアトレード認証制度」も「開発途上国」の支援、「国内農業者」の支援の違いはあれ、国内茶農家の苦境が消費者の理解が得られ支援につながれば重要施策だと思う。	ご意見ありがとうございます。 持続可能な荒茶取引（茶業版フェアトレード）環境の整備は、重要施策と位置付け取り組んで参ります。
35		野菜等には「野菜価格安定制度」があり、価格保証を中心に考えていると聞きますが、「緑茶」もそれに準ずる施策ができるのか、専門家との研究をお願いする。	具体的な内容はこれから検討して参りますが、検討にあたっては学識経験者にも意見をいただきながら進めて参ります。
36		自由経済下では市場原理、競争原理がはたらき、品質と価格で競争力のあるものが勝ち残っています。10 年後も「掛川茶」が生き残るためには、生産者の保護はもちろん必要だが、まず先に品質・ブランド力・競争力による川下の消費の活性化が必須課題。そのためには「掛川茶未来創造プロジェクト」を案で終わらせることなく、必ず実行してほしい。	ご意見のとおり、「掛川茶未来創造プロジェクト」を茶業界、行政及び市民が一体となって実行するよう努めて参ります。
37		掛川茶をブランドとして残す為に 1,000ha 本当に必要か。	お茶は主要農産物であるだけでなく、茶商社、機械メーカーなど多く産業の集積地となることで、掛川茶のブランドを形成しています。茶園面積（生産量）の確保は産業全体の継続にも必要であると考えています。また、茶園は美しい景観を形成しており、市民の原風景、市外の方からは掛川市のイメージを形成する重要な要素となっています。 このような点からも、減少にブレーキをかけ生産量を確保していきたいと考えています。